第11回市民学校

細川氏と田村の館

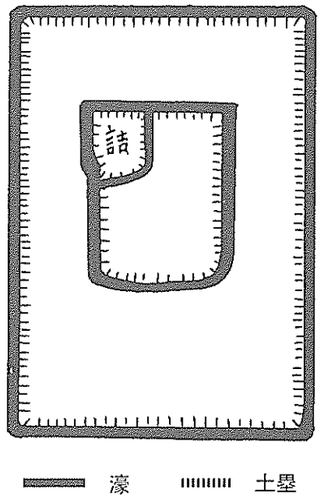
佐川高校教頭　詫間　一之氏

細川氏というのは山陽、四国、近畿付近の七か国を支配する足利一門の最も有力な守護大名の一つでした。足利尊氏は鎌倉幕府を倒した三年後、後醍醐天皇を中心とする政府に反旗を翻し、新田義貞の軍勢に打たれて九州まで敗走していくときに、細川氏を四国に配置します。こうして、一三八〇年に細川氏の一族が守護代として田村の荘に入ってくるのです。しかし応仁の乱で、一五〇七年に京都の本家の細川政元が死ぬと、土佐の細川氏も京都に引き上げてしまい、田村の荘における細川氏の治世は終わります。

その細川氏が住んでいた「田村の館」について話をしていきたいと思います。

中世の城には、百㍍から二百㍍くらいの高い山の上に城を構える山城、百㍍未満の山の上に城を構える平山城、平たんな所にある平城の三種類があります。田村城館はどちらかというと、「平城式の平たん面にある複濠式複郭式城館」と言われています。城館の構成は、館の真中に館の中心があり、それを土塁が取り巻いて、その周りに濠が掘られています。この濠をさらに土塁と濠が取り巻いています。そして東のへい、西のへいをへて、さらに広く土塁が巡っています。その外を濠が取り巻いています。また、田村遺跡の発掘調査の結果、城館の一番外側に巡らされている濠の一つのカーブが出てきました。その結果、田村城館は、一番外側を巡っている濠は深さ二㍍くらい、幅六㍍であったと推測され、細川氏の館は四町五反から五町歩の広さであったと考えられることができます。

田村城館推定図



また、この時の調査では、もう一つの大きな発見があります。これは祭りのときに使われた土器とともに全国から出てくるまじないのお札が見つかりました。そのお札に穴があいているところからみて、このお札は門に釘で打ち込んで、そのまじないの期間があけたあと、濠に捨てたのではないかという仮説が立てられます。また、そのお札には十六世紀半ばごろの時代である「大永」という年号がはっきりと読み取ることができたのです。

それでどうやら、濠の終わりの時期がその時期ではなかったかと考えられます。このように、濠の歴史も見ていくことができるのです。

また、現在空港の敷地内になっている所から溝に囲まれた中世の屋敷群が見つかりました。この屋敷群の復元模型は、今度できた歴史民俗資料館のメインの展示物になっています。これらの屋敷群には、三つの共通する部分があります。一つは母屋、台所であるかまや、納屋などがあること、二つめは、この溝が全部同じ方向であることです。この溝は古代の条理線に従って掘っているのではないだろうかと考えられます。三つめは、三十一件の屋敷中十六件に井戸があることです。井戸はだいたい敷地内の東南部の方向に位置し、大部分は石組みの井戸です。

溝に囲まれた広い屋敷には必ず井戸があります。あまり広くない屋敷にはありません。溝に囲まれない家もあります。時代は多少違うにしても、それらのことから身分階級が分

かるのではないでしょうか。今後、そういう点もふまえて、いろいろ研究していかなければなりません。

第十一回市民学校が、五月十一日から二十五日まで、五回にわたって大篠公民館で開かれました。広報では、都合により受講できなかった方のために、その一部を取り上げて掲載します。

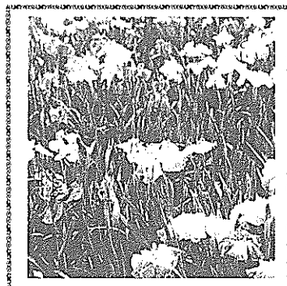
また、中央公民館では、市民学校の講演の録音テープを保存しています。

テープの貸し出しを希望する方は、中央公民館（☎64-3498）までお申し込みください。

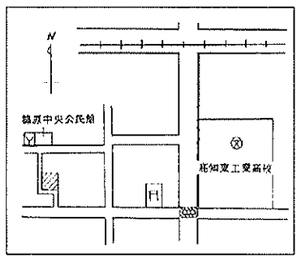
おわびと訂正

5月15日号広報なんこく8ページ「市民のページ」の「ビーグル犬譲ります」の中で、連絡先が間違っており大変ご迷惑をおかけしました。正しい連絡先は、河野八重子さん（☎62-0728）ですが譲り先は決まりましたのでお知らせします。

篠原のしょうぶ園見ごろに



篠原の窪田正夫さん方のしょうぶ園は今が見ごろ。見事なしょうぶの中の散策はいかがですか。



子育て広場

絵本はともだち

―― 親子の共感タイム ――

家庭教育学級専任講師　秦泉寺　千津

「うちの子は時間があればテレビばっかり…。もっと本を読んでくれたらいいのに。」「どうしたら本を読む子になるでしょうか。」などお母さんたちの声をよく聞きます。また、「最近の子どもは活字離れして本を読もうとしない」という声も一方にあります。

子どもたちは本が嫌いになったのでしょうか。

小さい子どもたちは、お話を聞いたり、絵本を見たりすることが大好きです。子どもが本の世界へ入っていくのには、お母さんの読み聞かせから始まります。

お母さんがまくら元で読んでくれるお話を聞きながら、いつのまにか眠ってしまったり…。お話の続きは、またあしたね、と約束したり…。一対一でのお話は、子どもにとってなによりもうれしいことなのです。

お母さんのひざに抱っこして絵本を見ていると、いろいろな空想が子どもの世界に生まれます。お母さんも絵本の美しさを感じたり、登場する人物や動物になって、子どもと一緒に笑ったり、ワクワクしたりするのも楽しいことでしょう。

食後のひととき、おやすみ前の三十分、本を読みあい語りあう光景はなんとすばらしいことでしょう。一日のうち、わずかの時間でも親子の場をもつことはたいせつなことです。

子どものときに、心を動かす体験をいっぱいさせてあげましょう。

子どもは、気にいった本を何回も繰り返し楽しみます。

読み聞かせから、お話のおもしろさやことばのおもしろさを知り、しだいに文字にも興味を覚えるようになっていきます。自分で読めるようになると、さらに興味が深まり「読みたい」と思うようになります。

子どもにとって毎日の生活の中で、文字と出合える環境づくりは大事なことです。

自分で読めるようになっても、お母さんに読み聞かせてもらう喜びはまた別なもの、小学生になってもときおり、読み聞かせてあげたいものです。

本は子どもの心を育てます。

子どもとの日々のふれあいの中に、絵本や音楽など様々な感情体験をとり入れ、豊かな心を育てていくよう心がけましょう。